



肝ぞう通信

第6号 《肝がんの化学療法と副作用対策》

お知らせ

肝疾患医療センターは、肝疾患に関する心配事や悩み事のご相談にお応えしています。当院では、総合相談室が窓口になっております。

場所：病院1階
総合相談室

受付時間：
平日 9:00～15:00
土曜日 9:00～12:00
(第2・4土曜日除く)

豆知識

肝細胞がんの薬物療法の副作用対策では、患者さんご自身の日々の症状の観察と、医師・看護師らへの早期の相談が重要です。

次回号

テーマ：
血液生化学検査の読み方

発行責任者

東海大学医学部附属病院
肝疾患医療センター長
加川 建弘

肝がんの化学療法と副作用

切除不能・局所療法無効の進行肝細胞がんに対して、2022年2月現在6種類の分子標的薬による治療が保険適用になっています。どの治療も肝機能が良い方（チャイルド・ピューA）が治療可能な条件です。

◆分子標的薬はがんの特徴的な蛋白などを狙い撃ちするお薬で、現在は①免疫チェックポイント阻害薬併用療法（点滴）が第一選択で、②点滴と③内服の分子標的薬は第二選択以降となっています。

◆分子標的治療は、外来で行われ、実際にあらわれる副作用症状は個人差があるため、患者さんやご家族がご自宅で副作用症状を観察して、医師や看護師へ気軽に質問や相談できることが、治療効果を上げるうえでとても大事になってきます。

①免疫チェックポイント阻害薬併用法（アテゾリズマブ：テセントリク®+ベバシズマブ：アバステン®）
：全身の免疫力を高めてがん細胞を攻撃するため、頻度は低いですが全身に免疫による副作用がでる可能性があります。問診や定期的な検査により、早期発見・早期対応を多職種・多診療科で行います。少しの変化でも医師、看護師に伝えてください。

②点滴の分子標的薬（ラムシルマブ：サイラムザ®）
肝がんの腫瘍マーカーAFP（アルファフェトプロテイン）値が400ng/ml以上の方が対象です。高血圧などはありますが、自覚的につらい副作用が比較的軽く、主に高齢の患者さんに適しているといえます。